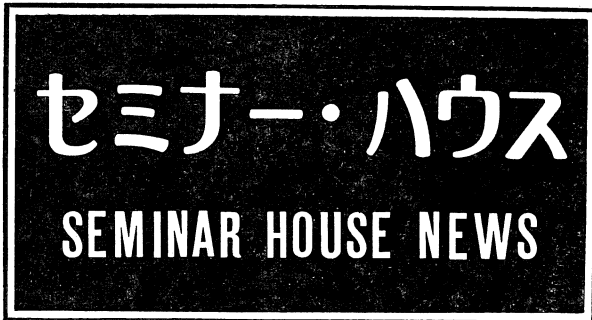


第11号 20円

昭和42年11月25日

内容

- 大学共同セミナーを企画して..... 1
- 育てよ、千人会..... 2
- 第11回大学共同セミナー講堂落成式に出席して... 4
- 5
- 夏のセミナー・ハウスで退官記念のコロキウム..... 7
- 利用状況..... 8



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》
東京都八王子市下柚木
電話 0426-42-4041-2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル3階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京 74590番

編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

日本の大学はいわゆるマスプロといわれる状態にあるが、同時に大学相互間の横の知的交流も大変悪く、非常に閉鎖的である。これが教授相互の間についても、教授と学生の間についても、遺憾ながら現状である。一つの大学のなかの学部相互さえさうだから、いわずや大学相互間の交流などは容易に望むべくもないといつてよい。

私個人はさしあたりドイツの大学制度のように、ある学科はハイデルベルグ大学のある教授の講義の単位をとり、ある学科はゲッチンゲン大学のある教授の講義をきき単位をとるといふようなことができればいいと思うが、これにもいろいろ技術的にむずかしい障害がある。そこでいくらかでも大学の枠をやぶった知的交流の場として、私は共同セミナーの企画に賛成し、協力した次第である。セミナー・ハウスが共同セミナーを企画することはきわめて有意義であり、セミナー・ハウスの存在価値を高めるであろう。

ところがこの企画で、いざ募集してみると非常に沢山の人が応募され、それぞれもつともな応募理由を書いているので非常に困惑した。セミナーというのは私の経験によれば最大限20人である。それで今回は四年生は最後の参加の機会なので優先することとし、二年生も大学院は別に考え、二年生も全部遠慮してもらった。と同時に一つの大学にあまり集中しないよ

うに二〇大学に配分し、共同セミナーの性格を発揮できるようにした。それでもなお結局六三人が参加することになった。したがってこのセミナーには、はじめから二つのディレクタがあるわけである。一方においてセミナーの効率を維持するにはこれでも人数が多すぎるし、さりとて、これ以上に数を減らせば、参加希望者の圧倒的多数を排除するという結果になる。そこで、便宜上三つの組に分けることにしたが、いずれにして

ば、文学部の学生も関心をもち、また討論に対等に参加できるようになテーマが望ましい。その意味で便宜上、私の「日本の思想」をテキストにしたわけである。けれどもそのためにさう短い時間ではやりようがなくなつたのである。さういうわけで、どうかこの三日間だけに期待しないでいただきたい。そのかわり袖振り合うも他生の縁だとすれば、このセミナー・ハウスで諸君と知り合ったことを私も忘れないようにして、諸

も、一人一人の参加者との対話の時間はほとんどないことを覚悟して、過剰な期待をもたないでほしい。第二のディレクタは、いかにも二泊三日では時間が短かすぎるということである。テーマを局限して、たとえば政治思想史のある問題だけにすれば短い時間でも何かやれるが、そうすると法学部とか政経学部とかの学生に関心が片よってしまふ。日本の大学では時間割が過密ダイヤで他学部の自由聴講が事実上、なかなかできないので、冒頭にいった趣旨からすれば、

丸山真男が社会人となつてからも個人的な接触を持つように努めたいというのが私の心構えである。ただ、特に希望したいことは、三日間を最大限に生かすために、大部分はお互いに未知の諸君が、三日間の間にお互いに接触して交わりを深めてほしい。私と学生諸君との間に個人的に放射状に線がひかれるのでなく、むしろ第一義的には参加学生の間で配線がお互いに縦横にひかれることがぞましい。私はその配線の間に入り込んでいって、諸君相互の知的な交通の媒介

者にならう。私を中心とした放射状のコミュニケーションの構造では、ラジオやテレビと同じことになつてしまふ。未知の、ちがった大学の諸君がお互いに知的交流をするための最初のきっかけとして、このセミナーを最大限に利用してほしいと思う。

ひさしぶりで日本の学生と話してできて非常に嬉しかった。その活動的なエネルギーがますますやましく思う年齢になつたのですが、それでもいっしょに食事しながら十分話があい通じ、心があい通じるのだということが確認できて、自分はまだ完全に過去の人間ではないとホッとした。もう一つ自分のことをはなれてたのしいと思つたのは、あれだけ大学の格差が問題にされ、丸山さんの言葉で、また「たこつば」的に日本の社会がたてわりにこじんまりした共同体にわかれてくるにもかかわらず、ここでいろいろな大学の人がいっしょに生活して、いっしょに議論しあつていふことです。セミナー・ハウスの成果を祝福して、今後の発展を祈っております。

丸山真男



丸山真男
東京大学教授

大学共同セミナーを企画して



R.P. ドーア
ロンドン大学教授

A Place to bridge
the Generation Gap

丸山真男が社会人となつてからも個人的な接触を持つように努めたいというのが私の心構えである。ただ、特に希望したいことは、三日間を最大限に生かすために、大部分はお互いに未知の諸君が、三日間の間にお互いに接触して交わりを深めてほしい。私と学生諸君との間に個人的に放射状に線がひかれるのでなく、むしろ第一義的には参加学生の間で配線がお互いに縦横にひかれることがぞましい。私はその配線の間に入り込んでいって、諸君相互の知的な交通の媒介

者にならう。私を中心とした放射状のコミュニケーションの構造では、ラジオやテレビと同じことになつてしまふ。未知の、ちがった大学の諸君がお互いに知的交流をするための最初のきっかけとして、このセミナーを最大限に利用してほしいと思う。

育てよ!

千人会

新しい方式の維持会

一、〇〇〇人の会員を募る

あなたの誕生日を記念して

早くも千人会の申込をして下さった方のお名前を記すことによつて、千人会の性格をご承知願いたい。セミナー・ハウスが真に応援するに値する事業であることを十分お認めいただいた証人のような方々である。大学在学中、最もよくセミナー・ハウスを活用された藤本、飯尾両君のごとき若い社会人が自分のサラリーのなかから貴重な宝を捧げようとされたことに對し深い敬意を表したい。大学問題のやかましく論議されるときに、こうした若い人の心を動かす何ものかがセミナー・ハウスの教育のなかにあったというとは何とうれしいことであろう。共同セミナーにご協力下さった諸教授の賜物が事実となってあらわれたのである。

（昭和四二年度慶応大学卒）

一〇、〇〇〇円

飯尾時計店 飯尾右一

（昭和四二年度上智大学卒）

一〇、〇〇〇円

慶応大学教授 佐原六郎

一〇、〇〇〇円

東京大学教授 丸山真男

三、〇〇〇円

青山学院大学助教授 田島忠次

一〇、〇〇〇円

清水建設取締役 玉真秀雄

一〇、〇〇〇円

一橋大学学長 増田四郎

一〇、〇〇〇円

東京大学名誉教授 茅 誠司

一〇、〇〇〇円

中央大学総長 升本喜兵衛

三、〇〇〇円

大学セミナー・ハウス職員

飯田能子

（昭和四二年度青山学院大卒）

一〇、〇〇〇円

上智大学教授 鈴木 皇

五、〇〇〇円

三井銀行掘留支店長 池田 有

一〇、〇〇〇円

日本女子大助教授 一番ヶ瀬康子

一〇、〇〇〇円

国立大学協会主事 中川 章

財団法人であるが、大学セミナー・ハウスは基本金わずかに二百万円、運用財産三百万円の財団にすぎない。これが年間利子収入はわずかに四十余万円である。もちろん公けの補助金はない。

この財団は特定の団体によつて

設立されたものではない。法人の主体は国公立大学三十校の会員校であり、安定した収入は三十校の会費年額約九百五十万円である。

清潔な施設、高い思考の環境、そして安価な使用料金こそは学生を対象とするセミナー・ハウスの基本の方針である。しかもセミナー・ハウスに対する要望は月に年に拡大する。毎日七つ、九つのゼミナールが熱心に行なわれている。セミナー・ハウスが日本の大学のなかに存在する理由はきわめて明らかである。

丸山真男教授が敢えて大学共同セミナーを主催されるように閉鎖的な日本の大学制度においては、どこの大学の学生にも解放する高度の講義が必要である。事実これまで十一回開催した共同セミナーは毎回二十、三十の大学から多数の学生が参加し、非常な成果をあげている。この共同セミナーを健全に発展させるためにも若干の奨学金が必要である。

大学セミナー・ハウスは現在創設当初の建築工事のため六千万円の借金をまだかかえ込んでいる。安易な経営は許されないのであるが、その負っている使命にかんがみ、積極的な教育活動を展開しなくてはならない。

大学セミナー・ハウスは形式にとらわれない最も民主的な経営を
行ないたい。人間の善意が結集されることを恐ろしいことができるとい

う聖なる冒険の実験を試みたい。
千人会の会員になることは慈善事業に寄付することではない。もっと積極的な意味で大学教育の責任を分担していただくのである。金銭のことですから無理のないように願います。千人会は会員が一、〇〇〇人に達したときに締め切ります。日本にわれわれの協力者が一、〇〇〇人いないということは信じられません。セミナー・ハウスが応援するに値いなしと思召されたならばご随意に脱会して下さい。

千人の一人として・・・



慶応大学昭和四二年度卒業
藤本 紘

昨日、セミナー・ハウス・ニュースをいただきました。そのなかに先生が記念式典のときに提案なさった「千人の会」のことが出ておりますが、ぼくもぜひその会員にしたいと思っております。

ただ一回に一万円は現在無理なので、毎月千円ずつお送りしたいと思います。ぼくの誕生日は三月ですが、第一回目は来年六月まで計一万円、第二回目は昭和四四年四月、第三回目は四五年二月末、昭和四五年の三月からは、毎年三月にまとめてお送りすることにしたいと思っております。

今月の一五～一七日まで東京に帰りました。少々忙しくて、八王

子に行く時間はありませんでしたが、海老沢君（東工大）、芳山君（早大）、伊藤君（慶大）、平井さん（東女大）、新田さん（日女大）に会いました。いまこちらに帰ってきて思いますのに、多くのすばらしい友と、尊敬に値する先生方を知る機会をつくって下さったセミナー・ハウスに感謝以外の何物もございません。いまこうしてぼくが考えたり、本を読んだりしているうちの多くのものは、セミナー・ハウスから得たものです。西村先生には二年間読書会でお世話になりました。また野村実先生にもおめにかかることができました。白井常先生には、現代の若者の考え方を十分理解している大人のあることをおそわりました。川原先生には教育の大切さを授業（早稲田に聴きに行きました）を通しておしえられました。また山本和代先生には自分を鍛えることを学びました。そして飯田先生からは自分の使命を知り、遂行することの貴重さを身をもって実践されている姿をつぶさに見ることができました。それにも増して大きな喜びは大学の壁をこえて先師の業績を聞き友を得たことでした。

この喜びを感謝であらわすにはあまりに少ないのですが、千人会の会員となって、今後のセミナー・ハウスの発展の一助になりたいと思っております。

（飯田専務理事の書簡から）
（日本長期信用銀行勤務）

寄贈図書―新図書館のために

(昭和四二年二月〜九月)

「女性と家庭のあり方」

林 潔殿

「東京大学要覧」

「東京大学一覽」

「東京帝国大学五十年史」(上・下)

「歴史の研究」一巻・三巻・二一巻・二三巻

「経済学辞典」

「歴史学概論」

「ヨーロッパとは何か」

「歴史する心」

「画と随想の本」

「音楽社会学」

「知識人の擁護」

「公園」

「われ炎となりて」

「生と死の探求」

「真実の探求」

「聴覚生理学への道」 勝本保次殿

「社会経済学の展開」

「国際経済政策」

「政治家の終り」

「現代の政治学」

「一九八五年」

「驚くべき日本」

「経済計画」

「資本理論と経済成長」

「豊かさへの挑戦」

「それでも日本は進む」

「これが日本一」

「人間性の向上、余暇と継続教育」

「財務諸表論」

「建設業の会計管理」

「原価計算」

「批評の復権」

「音楽の意味の発見」

「アナーキスト」

「ソヴェトの政治」

「現代政治とイデオロギー」

「モンゴル」

「アジアの歴史と思想」

「天皇制国家の支配原理」

「真珠湾への道」

「核時代の国際政治」

「冷戦―政治的考察」

「ベトナム戦争」

「人間形成と実存哲学」

「若き人々に」

「キリスト教思想史」

「日本キリスト教史論」

「マルティン・ルターと宗教改革の精神」

「現代人の思想と行動」

「斜視的ドイツ論」

「随筆」

「地理学一般教育教材」

「中央評論」一九一〇・二

「ドイツ文化」第五号

「紀要、文学科」第二二号

「紀要、史学科」第二二号

「英語英米文学」第七号

拡充資金寄付者第三回報告

一五、七二〇円

一三、一〇〇円

一〇、〇〇〇円

五、〇〇〇円

三、〇〇〇円

二、〇〇〇円

三、〇〇〇円

五、〇〇〇円

一、〇〇〇円

二、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

五、〇〇〇円

一、〇〇〇円

二、〇〇〇円

五、九〇〇円

一、〇〇〇円

二、六七〇円

三、一八〇円

一、五〇〇円

一〇、〇〇〇円

一、二〇〇円

三、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

五、〇〇〇円

二、〇〇〇円

五、九〇〇円

一、〇〇〇円

二、六七〇円

三、一八〇円

一、五〇〇円

一〇、〇〇〇円

一、二〇〇円

二、〇〇〇円

一、〇〇〇円

三、〇〇〇円

五、〇〇〇円

八王子市市長町

慶応大学教授

慶応大学教授

中央大学通信教育部

石田竜次郎

記念セミナー

八王子市市長町

肥後兎子殿

渡辺彰殿

円谷プロダクション

日米学生会議

伊丹潔殿

東京大学計量医学研究会

第十回大学共同セミナー

全国高等学校家庭クラブ連盟

中央大学通信教育部

石田竜次郎

加藤諦三殿

岩崎力殿

芝田進午殿

増田四郎殿

安藤英治殿

天野恭徳殿

竹内書店殿

林 潔殿

早稲田大学中西ゼミナール

慶応大学教授

慶応大学教授

東京大学教授

順天堂大学生部長

第十一回大学共同セミナー

阿佐谷教会シオン会

裁判所聖書研究会

武蔵工業大学如学会

立教大学住谷ゼミナール

東京大学教授

丸山真男殿

独協大学福田ゼミナール

八王子職業訓練所電工科

「法学新報」第七四卷

「教育学論集」第八卷

「商学論纂」第八卷

「理工学部紀要」第八卷

「中央大学八十周年記念論文集」

「学説判例全集」三五冊

中央大学殿

松井源吾殿

「材料力学」

「科学と教養」二冊

「現代市民の育成と大学」

「物理化学序論」

「聖書年代学」

「大世界史」

「フィスカル・ポリシー」

「読書と或る人生」

「愛と知性のある生き方」

「IDE教育選書」三十冊

大原恭子殿

清水安三殿

「おうびりん物語」

「社会地球化学」

「哲学事典」

「歴史としてのスターリン時代」

「道しるべ」

「大学における人間形成に関する意見調査」

「相対性理論と常識」

「残された奥さん」

「ワークデザイン入門」

師岡孝次殿

「労働組合入門」

「現代の労働問題」

塩田庄兵衛殿

奉仕クルーズ

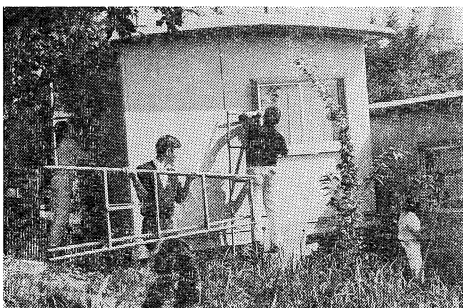
【会員五二名(一七枚)】

■雑巾づくりも一仕事■

七月に三根松子さん(日女大)他三名が掃除に、十月には三枝順三君(東大)が図書の整理にきた。奥繁光君(早大)の家が今夏、山津波に襲われたのを知り、早速カンパをするなど、奉仕グループはお互いの友情を深めたり、適宜な奉仕活動をしなから歩み出した。

十月十五日には、ユニット宿舎の窓ふき、植木の肥料やりなどの手伝いをしてくれた。そして参加者二〇名が昼食を共にし、今後の相談をした。

宿舎の窓ガラスをなく奉仕グループ



第十一回大学共同セミナー

主題 ■ 日本の思想 ■

——「日本の思想」を

テキストとして——

〔昭和四二年九月八、九、十日〕
指導教授

東京大学教授 丸山真男氏

〈ゲスト〉

ロンドン大学教授

R・P・ドーア氏

〈助手〉

東京大学大学院学生 岡利郎氏
〈参加学生〉 五九名（うち女子一六名）

早大（一〇）、慶大（六）、法大

（六）、日女大（六）、立大（五）、

外語大（四）、東大（三）、一橋大

（三）、中大（三）、成蹊大（三）、

都立大（二）、明大（二）、東女大

（二）、国際基督教大（二）、教育

大、神奈川大各一名。

丸山教授も大変な熱の入れよう

で、ABCのセクションに編成し

たが、とくにリーダーをおかず、

お一人で担当されまことに独演であ

った。しかし同教授の指導を受け

ている大学院岡利郎氏が運営を助

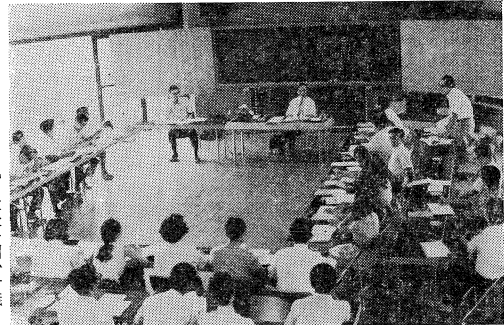
けてくれた。

朝は九時三十分から夜は十二時

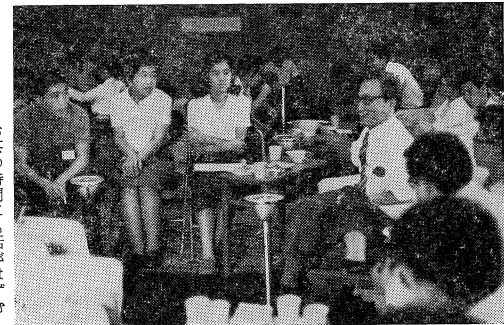
に及ぶという丸山教授との人間的

接触は若い学生たちにとって忘れ

ない体験となったに違いない。



丸山教授を囲む討論



お茶の時間も話はずむ

丸山真男教授セミナー大学別申込学生数調べ（ ）は女子

大学名	丸山真男教授セミナー大学別申込学生数調べ				計	大学名	丸山真男教授セミナー大学別申込学生数調べ				計
	二年	三年	四年	大学院			二年	三年	四年	大学院	
東京大学	7	4	1	3	15	東京女子	3	3	5	11	
一橋大学	1	1	1	2	5	武蔵工業	1	1	2	4	
東京教育	1	1	1	1	4	成蹊大学	1	1	2	4	
東京学芸	1	1	1	1	4	明治学院	1	1	2	4	
東京医歯	2	2	3	1	8	津田塾大	1	1	2	4	
東京外語	2	2	3	1	8	I C U	1	1	2	4	
横浜国立	1	1	1	1	4	神奈川大	1	1	2	4	
東京都立	1	1	1	1	4	上智大学	2	1	1	4	
早稲田大	20	15	3	2	40	千葉大学	2	2	2	6	
日本女子	6	9	5	1	21	学習院大	1	3	1	5	
慶応義塾	6	6	5	5	22	埼玉大学	1	1	1	3	
明治大学	2	1	4	1	8	国立音楽	2	2	1	5	
中央大学	5	2	1	1	9	埼玉学院大	1	1	1	3	
法政大学	5	3	2	1	11	専修大学	1	1	1	3	
青山学院	2	2	7	2	13	東洋大学	1	1	1	3	
立教大学	5	3	1	1	10	実践女子	1	1	1	3	
日本大学	4	1	5	1	11	合計	75	76	65	14	
	2	1	1	1	5		(22)	(24)	(14)	(2)	
							230	1	1	1	
							(62)	(1)	(1)	(1)	

学生との三日間

岡 利郎

「殿下、何を読んでいらっしやいますか？」

「言葉、言葉、言葉」

というの「ハムレット」のセリフの一節ですが、今回の共同セミナーで丸山教授のお手伝いをして

学生諸君と接しながら、コトバが氾濫していること、にもかかわらず（あるいはむしろそれゆえに）

そのコトバによって表現される「観念」「思想」がいかに貧しいも

のであるか、を痛感させられました。コトバの「豊富さ」と観念の

「貧血症」とが結びついているのが、われわれの世代の特色ではな

いでしょうか。今回参加された学生諸君は私の接しえた限り、皆そ

れぞれに優秀な方々でした。たとえは何か問題を論ずる場合、その

問題についての「知識」の豊富さという点で実に「博学」であり、

むしろかしい学術用語・専門語を「駆使」して議論することも実に

たくみです。しかし今話したと同じ事を別の言葉でいいかえたり

うに求められたり、さらにつっこんで第二、第三の質問を浴びせら

れたりすると、たちまち立往生してしまふ例が多かったように思

います。この点に関連して興味深かったのは、飛入り参加されたR・

P・ドーア氏と学生諸君との討論でした。はじめのドーア氏のお話

は地主の二つの類型と農地改革を関連させた、きわめてユニークで Stimulate なのでしたが、その

説明には田舎のおばあさんが聞いてわからないような言葉は、ほと

んど使われませんでした。それにひきかえ討論の時学生諸君の使

れた言葉は、また何とむずかしい専門語・学術用語にみちていたこ

とか。

しかもさらに驚くべきはそうし

た難解な用語を「駆使」した質問

のなかに、ドーア氏の立論につ

ての根本的な無理解が少なからず

あったことです。これはドーア氏

に対する場合に限らず一般の討論

においてもそうで、相手がなぜそ

ういうのかということの内面的に

理解しない（またはできない）例

がかなりありました。その場合に

は討論は文字通り「鬭論」とはな

りえても、Discussion にはならな

いのです。以上私は学生諸君に対

しなさか過酷の言をはいたかも知

れませんが。しかし私がここで指

摘した諸事実は、学生諸君だけで

なく、私自身にもある程度あては

まるのであり、その意味でこの文

章は私なりの「自己批判」をも含

んでおります。それを可能にして

くれたのは学生諸君との接触であ

ったことを考えると、本来私は丸

山教授の補佐役として学生諸君に

対しいわば「教育者」の立場にあ

ったはずでしたが、むしろ「教

育」されたのは私のほうであった

かも知れません。

講堂落成式に出席して
——私の感動——

国立教育研究所長
平塚 益徳

去る七月十日、東京都八王子市郊外にある大学セミナー・ハウスにおいて、開館二周年と新たに増築された図書室、講堂の落成とを記念する特別な会合が開かれたが、私はこの会に列席して、近來にない深い感銘をおぼえた。

当日の会のことは、同ハウスの専務理事の飯田宗一郎氏がすでに新聞紙上で公けに報告されたので、全体的内容にわたる点はこのでは繰り返さないが、わが国における大学教育の現状について深く憂えざるをえない一人として、私は実に大きな力づけをこの会合から与えられたことを、あらためて書きとどめておきたいのである。

二
多くの日本人にとって、最近の日本の大学についてのイメージには、はなはだ残念ながら、早大、



講堂落成式での平塚益徳氏

明大をはじめ国際基督教大、とくに現在紛争中の法大等、ジャーナリズムをおおいに動かしている学園騒動がどうしてもクローズ・アップされておき、また教授に対して言語道断、無礼きわまりない一部の学生——彼らはもはや学徒ではなく、市井の暴徒に他ならないが——の姿が、学生像の中核に定着してしまいがちである。かくいう私自身も、高坂正顕学長の不幸な受難に対して、心からなる憤りを感じざるをえなかつた一人であつて、いったいわが国の大学生、あの膨大な数にのぼる大学生の中に、真の学問を愛し、まず第一に人間として、尊敬すべきものを尊敬し、感謝すべきことを率直に感謝する、柔軟な心情の所有者が果たしてどのくらい健在なのか、はなはだ心もとなく感ぜしめられていたのである。

私は日本の戦後の教育の歩みを顧みて、教育の普及とか、とくに女性の開放等、戦前よりもまさり、かつ進歩した面も十分認めるものであるが、戦後の教育一般についてどうしても猛反省しなければならぬこととして、あまりにも多くの「畏れ」を知らず「感謝すべきこと」を忘れた人々が、社会生活の面で見出されることを指摘せざるをえないのである。いつてみればそれは「人間としての基本的なしつけ」の不足である。ところでこうした矢先、私は上述のセミナー・ハウスの会合で、

同ハウスを従来活用してきた頼もしい男女大学生の諸君が、セミナー・ハウスの事実上の育ての親の一人であられる佐藤善一郎氏に対して、心からなる感謝の歌を合唱し、美しい花束を同氏に贈つて、彼らのまごころを示した感動的な場に接したのである。これをただ単に文で書きつづつてしまえば、それらはむしろ平凡なことと印象づけるであろう。しかし事實はまったく然らず、私は彼らのなかに学問を真に愛し何よりもまずヒューマニティーの世界に生活の基礎をかたくおきつつあるまことに頼もしい学生群を少なからず目のあたりにして全国に必ずいるにちがいないこうした諸君のため、またその後継者がより多く輩出するためにも、国として、社会として、とくに大学関係者として、最善をつくすべきだと痛感せしめられるとともに、ほのぼのとした明るい気持ちと、大学教育の、正しい方向づけへの一つの貴重な示唆とを感じとつたのである。

丸山教授セミナーに参加して

一橋大学
長島 和弘

このほど充実した三日間を送つたのは、初めてなような気がしています。同室の友が、機械工学という社会科学の「総合」大学たる多くの通っている大学にある者とは異質の学問をしていたということ、そして彼が、自然科学者あるいは理系学生への、ほくのごくありふれたイメージ(ステレオタイプ)を打ちこわしてくれたことなど、共同セミナーでなければなかなか味わえないと思ひました。それからドーア教授がおっしゃられたように、「大学の格差云々」といわれているときに、数多くの大学の人々に接して、決してそんなことはないということを感じました。多くの情熱をもった学生がいるのだということを知つただけでも大きな収穫です。

共同セミナーでの、一種の連帯意識と情熱とを、自分の大学のなかではどのようにして得られるのだろうかという、何か非常に心細いものを逆に感じはじめているのも事実です。しかしそうした大学のなかでこそ、共同セミナーでもつた情熱を持続させ、また共同セミナーにあつたような連帯意識を醸成させていくことが大事なのだと思います。きわめて困難な仕事ですがやらなければなりません。

日本女子大学
坂井 和代

社会がめまぐるしく動いており、私たちがいま、この現在の時点で何を問題としなければならぬのでしょうか。たくさん考えなければならないと思います。その一つに「日本の思想」もはいるでしょう。「戦争」という人間のつくり出す巨大な怪物に対して、種々の学者が研究しております。知識人が仲間をつくつて平和アピールをくりひろげています。しかし私はここに一人の平和への使徒を眼前にすることができました。ベトナム戦争の責任を追求する人々の多いなかで、静かにじっと、日本の戦争責任を追求している方が、いらつしたのです。私たちが何を問題テーマとしなければならぬか。それをじっと凝視している姿に、単に丸山先生を信奉するというのではなくて、心に感じるものがございました。少なくともこの共同セミナーに参加したことによって、私は、自分自身を含めてもう一度日本人に眼をやつてみたいと思ひます。突如として、「思い出」が吹き出してきて、再び全体主義のはびこることのないように、少なくとも自分自身を規制していたと思ひます。マスプロの大学におりますと、どうしても孤独に陥りやすいのです。その孤独感がアジテーターに心奪われるのです。自己を投げ捨てて人の意見へすぐ迎合したがる態度を、丸山先生は叱りつけておられるように見えました。ただ一筋に自分道の精神的貴族主義で押し通される姿に、ただただ敬服するばかりです。あの学問の精神だけは受け継いでゆきたいと思ひます。

夏の セミナー・ハウス

新しい講堂が予想通りその効用を發揮してよく使用された。新しくつくったキャンブファイアの広場もしばしば若人の声とともにかがり火が燃えた。セミナー・ハウスは大きな成長を遂げた。

七、八月は、いわゆる夏休みで、セミナー・ハウスの利用者もぐんとふえて、宿泊者延人数は、七月、三、九七七人、八月、四、二一人を数え、今年の一月と六月までの月平均とくらべるとそれぞれ六〇・七〇%も増加しさらに昨年の七、八月とくらべると三九%の増加を示し、開館二周年を迎える。

ファイアストームを囲む学生たち



たセミナー・ハウスの夏は、「学生」でにぎわった。利用者の特色としては、大学連合集会や学会に属するような比較的多人数の団体がふえている。数字で示すと、このような団体参加者の延人数は、七、八月合わせて三、七二八人を数え、月平均にするると約二・五倍の増加である。

主なものを拾ってみると学会に属するものでは大学英语教育学会主催の夏期大学英语教育セミナーが三週間にわたって行なわれたのはじめ、全国大学電気教育協議会、日本地域開発センターの合同研究会、文部省主催の留学生担当者研修会、国際生化学会セミナー八〇名による国際コロゲン討論会など、連合集会に属するものは、国際問題研究所主催の夏期合宿セミナー、AIESEC、日米学生会議、AFSなどで、国内だけでなく国外の学者、学生の利用が目立ったのも夏のセミナー・ハウスの特色である。異色のセミナーは一橋大学名誉教授石田章次郎先生の定年を記念しての「コロキウム」である。定年といえはホテルや料亭で宴会でもするところであるが、セミナー方式をもって定年を祝うというのはいかにも気のきいた考案である。

外国の教授や学生をもてなす意味で地元の人々による盆踊りや伝統芸能などを見せたり、また学生たちはキャンブファイアとか火花などを楽しんだ。

実りの大きかった 計量医学セミナー

高価な電子計算機を持ち込んでみなさんが仲よく熱心に研究討議している姿を拜見してセミナー・ハウスにふさわしいグループが出来た。機械をつかったセミナーとしては最初のケースなので、利用方法の一つの型を高橋先生にご紹介しました。

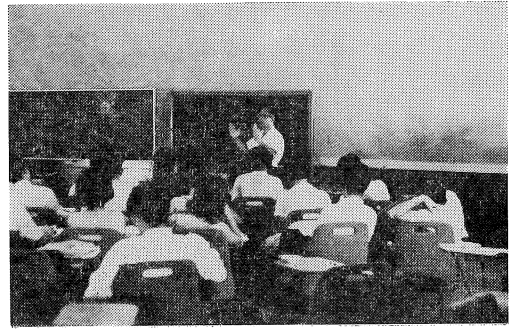
わたくしたちの物見かたは、物理学や化学の論理によって強く影響されている。それは機械論、決定論と呼ばれるものである。しかし、物ごとを具体的にとらえようとすると、そうは行かなくなると。物と物の関係は複雑にからまり合い、Aという原因からBという一つの結果が必ずしも生ずるとは限らない場合がある。機械論は有機体論へ、決定論は不確定性理論へと推進されなければならなくなる。

統計的認識の必要性は、このようにして生じ、わたくしたちの行動決定の原理も不確定性の認識の上で作上げられなければならないのである。とくに医学、生物学の領域では、そうしたことの必要性が強く感じられる。それなしには、医学は科学となりえないのである。

しかしながら、わが国の統計教育の体制はきわめて不完全であり、高等学校でも形式的な統計の初歩があるだけで、認識の立場との関連性は考えられていない。大学の教養学部においても、統計学は、現実と接触することの少ない数学者によって講じられているために、現実との対応関係が学生たちの頭にはいつていないことが多い。

こうした欠陥を克服するため、わたくしたちは同志を持つて、そうした方向に興味を持っている学生たちを誘って、計量医学セミナーを企画したのである。北は札幌から西は岡山までの各地が集まり、教授数名を含めた五十五名の勉強をすることとなった。午前は講義、午後は計算実習、夜はディスカッションと、ほとんど完全に時間を利用したのであるが、第四日目の夜はキャンブファイアを囲んで、息抜きをした。

会場には、電子計算機会社から小型の計算機三台の提供を受け、面倒な計算はこれを利用したが、若い学生たちの柔軟な頭脳はたちまちこれをマスターし、自由に使える者も十数名の多きに達した。青年たちは、よい環境とチャンスさえ与えられれば、伸びて行く力が満ちあふれているのをまざまざと見せつけられ、わたくしたち大人の責任を痛感した次第である。なお、この期間中に計算した例題



は二〇〇題を越えた。それ以外にも、快適な勉強の場所がないことにはどうにもならない。ここ大学セミナー・ハウスは、そうした点でまことにすばらしい施設である。常識的でない建物の設計は、最初は異様に感じられるが、やがてそれは魂の自由な跳躍のための好ましい条件とさえなるように感じられる。

このようなセミナーへの要望は全国に広く潜在していると考えられるので、夏と冬の両者を企画しようという意見も起こっている。わたくしたちは統計学の理論と実際のほかに「認識論における統計学の位置づけ」という討論会において、大きな実りを得ることができた。

退官記念の

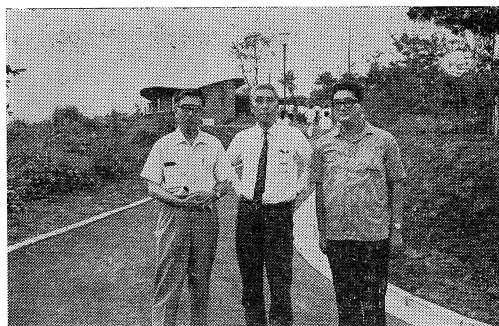
コロキウム

一橋大学名誉教授
石田竜次郎

東京商科大学・一橋大学に四十年勤務して今春退職したとき、親しい地理学界の友人たちから、何か祝賀会でもという話があったのを断わりつづけたので、結局大学セミナー・ハウスで二泊三日のコロキウムを開くことになった。

肝煎りの人たちが三月ごろから、三回もサーキユラーを出して準備を進めていたが、いざ八月十四日に開いてみると、急に外国へ出張する人、科研費や学生指導の調査旅行の日程と重なる人などが

左石田先生右竹内教授



出て確定参加者は三十六人。朝昼夜、三時間ずつの各セッションのテーマはつぎのとおり。

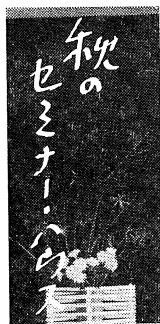
- 一、外国の地域調査における地理学の問題
- 二、集落や歴史の研究における社会地理学上の課題
- 三、自然地理学と自然環境の問題
- 四、経済地理学における理論と野外調査
- 五、自由討議

一、四の各セッションは主報告者が自分の行なった研究を土台として、地理学上の課題を約一時間話し、関係分野の各人がまた自分の研究成果を引用しながら、これを批判討議するという方式であった。

第二日はいちばん長い日であった。懇親夕食会の後、記念講演「地理学的思考へ」はついでピールのせいひか、二時間半の長広舌で、夜の十一時になってしまったので、気鋭新進の若手諸君からツルシ上げられる時間がなくなってしまうのは、幸であったか不幸であったか。もっとも諸君は毎夜、二時三時まで屯してディスクスしていたらしいが。

合計わずか五十時間たらずではあったが、普通の学会における一人報告二十分、質問討議七分などというのと大違いで、行住坐臥、気のすむまで論じ尽されたという感じであった。しかもその費用が都内の豪華なホテルで一回の会食

をするのと同じくらいであり、毎年では少しせわしいから隔年に開きたいというのが、参加者みんなの感想であった。同時に私としてはまことにありがたい退官記念の贈り物であった。



多摩丘陵の自然は日ごとに秋色を加えてくる。セミナー・ハウスの構内もすすきの穂が美しい。そこここに萩が咲いている。二年前東京女子大の白井先生と学生たちがつくってくれた第一群の花壇には菊の花の盛りである。武蔵野特有の雑木が色づき始めている。新しく建った講堂と図書室が秋空の下に自然美と調和している。丘の上の二本の旗竿には、旗がたなびいている。ふとその下を見るとアベリヤが咲き、遠くの七群にはサルズベリが見える。学生の小グループが話しながらそして遠く富士山を眺めたりしながら新しくできたプロムナードを講堂のほうへ歩いていく。

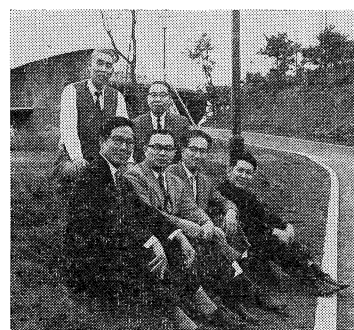
毎夜セミナー室は夜おそくまで電灯が消えない。多い日には七つまたは九つのゼミナールが開かれる。七つのゼミナール室では不足することが多い。秋こそはゼミナール・ハウスらしい光景が展開される好シーズンである。読書の秋！それ

はセミナーの秋といってもよい。名月の夜、ダンゴを食べながら月見をするという風流な光景もある。勉強の合間の一コマである。卒論の中間報告にくるゼミがあり、二人で一週間卒論のまとめに滞在したり、出版社の約束にせまられて翻訳のため、たてこもったり、休講の穴うめの補講をしたり、大学の後期のあわたたしさがセミナー・ハウスでも感じられる。セミナー・ハウスはもう大学の一部なのである。

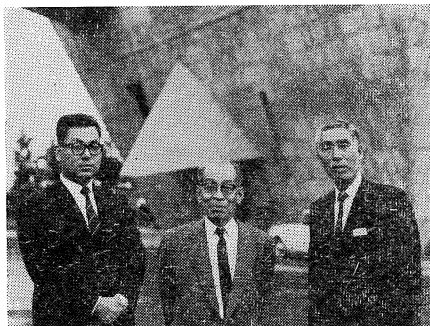
またお会いしましたね
あなたも来ていたのですか

セミナー・ハウスは出会いの場所である。友情の丘と呼んでもよいかも知れない。つぎの写真はそれぞれのゼミや個人研究のため来られた先生方が偶然に顔を合わされたのでちょっとならんでもらったのである。

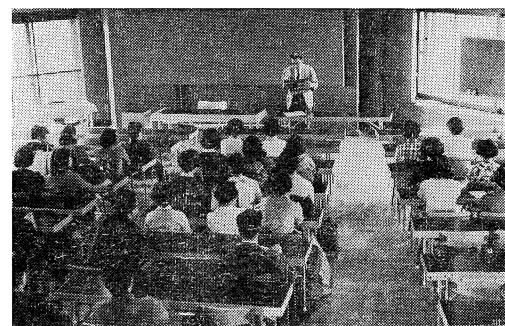
前列左から西村、杉山(東大)、安藤(成蹊大)、小川(東大)
後列右から田島(青学大) 飯田(専務理事)の各先生



新しく本法人の理事にご就任の早大総長阿部賢一氏が一〇月一四日視察のため訪問下さる。



バッハの解説をされる東京大学杉山好助教授(講堂のレコード・コンサート)一〇月一〇日





利用状況

◆八月

日本YWCA全国高校カンファレンス
AIESEC国際セミナー
留学生担当者研修会

文部省大学学術局留学生課

千歳船橋教会夏期修養会

早稲田大学教授

名取 順一

全国高等学校家庭ク指導者研修会

中央大学通信教育部長 下村康正

中央大学第二歌舞伎研究会

白梅学園短期大学教授 田中未来

退官記念ゼミナール 石田竜次郎

日本基督教団白金教会夏期修養会

東京大学心理学教室 竹内 衛三

カトリック若い研究者会

東洋大学助教授 中島 盛夫

日米学生会議 国際教育振興会

国際基督教大学講師 田川 建三

国際コラーゲン討論会

東京農工大学助教授 高島 貢

日米合同サマーキャンプ

A F S日本協会

慶応義塾大学通信教育部夏期特別ゼミ

沢田 充茂

東京都立大学教授 伊丹 潔

学生基督教友愛会 飯坂 良明

計量医学研究会 高橋 暁正

国際商科大学講師 泉 暹

早稲田大学研究室教務補助

日女大助教授 中島 高史
東京都立大学教授 一番ヶ瀬康子
明治学院大学助教授 佐藤 隆夫
森藤 一男

◆九月

早稲田大学助教授 中西 睦

日本女子大学講師 伊沢 秀而

中央大学講師 西尾 孝明

早稲田大学助教授 小林 寛

慶応義塾大学助手 森 真作

慶応義塾大学教授 佐原 六郎

早稲田大学教授 安藤 良雄

一橋大学講師 堀部 政男

横浜国立大学講師 杉原 一昭

日本女子大学教授 久松 潜一

早稲田大学助教授 出居 茂

早稲田大学教授 川原 栄峰

日本女子大学助教授 国田百合子

一橋大学教授 薬利 重隆

早稲田大学教授 永山 武夫

日本女子大学講師 河部 利夫

明治学院大学講師 高橋 勇悦

一橋大学講師 中川 学

東京YWCA家庭青年部

白梅学園短大教授 井手 則雄

一橋大学助教授 米川 伸一

中央大学教授 岩尾 裕純

裁判所聖書研究会 永井登志彦

立教大学講師 淡路 剛久

阿佐ヶ谷教会シオン会

武蔵工業大学建築学科如学会

中央大学教授 樺 俊雄

日本女子大学教授 杉溪 一言

東京大学助手 谷口 晋

聖心女子大学国際関係クラブ

武蔵工業大学教授 酒井 勇

立教大学教授 住谷 一彦

全国商工会青年連合会 川崎製鉄
新任係長研修会 日興証券
管理者研修 神島 二郎
立教大学教授 石川 与吉
立正大学教授 石川 与吉
経営指導員研修会 全国商工会連合会

東京大学駒場祭準備会

東京都立大学助教授 桐敷真次郎

東京都立大学助教授 塩田庄兵衛

独協大学写真部 福田 昌利

東京都立大学教授 千葉 正士

明治学院大学教授 天達 忠雄

東京都立大学教授 中野 尊正

ゲスト・ムーム宿泊者

水野勉氏、緒田原濟一氏、谷口文

朗氏、小泉明氏、チャールズ・

N・バング夫人、ハリー・ウィリ

アム夫人、イヴァン・ブットマン

氏、リー・ツァイグララー氏、池田

文雄氏、西村三郎氏、矢谷芳雄

氏、仙波千代氏、金原ちゑ子氏、

師岡孝次氏、渡辺彰氏、石田竜次

郎氏、原研弥須氏、ヴァン・ウイ

ンクル氏、E・クロネン氏、J・

T・エドサル氏、E・カシャルス

キー氏、伊勢村寿三氏、河瀬収

氏、岡田晃氏、高橋暁正氏、吉村

功氏、佐藤登志郎氏、佐久間昭氏、

佐原六郎氏、田島壮幸氏、藻利重

隆氏、丸山真男氏、岡利郎氏、鈴

木保司氏、中田広美氏、久保田武

勇氏、大辻繁雄氏、名山良明氏、

剣持昇氏、石川与吉氏、中場健一

氏、久保田武勇氏、菊地久義氏

予告

▼第十三回共同セミナー

【期日】昭和四二年一二月一

八、一九、二〇日

【主題】現代人とキリスト教思

想

〈全体講義〉

「キリスト教思想の発展」

東京神学大助教授 佐藤敏夫氏

「現代日本の精神的状況」

東京大学教授 宮田光雄氏

〈セクシオン指導教授〉

東京神大北森嘉蔵、同熊沢義

宣、東女大小川圭治、東大杉山

好、青山学院大荒井猷、東北学

院大茂泉昭男、立教大中沢治樹

各氏

〈ゲスト〉

ICU教授 長 清子氏

▼クリスマス・セミナー

昭和四二年一二月二〇日

講話、レコードコンサ

ート、パーティ、キャン

ルサーピス

▼新年セミナー

昭和四三年一月一三日

講演、レコードコンサ

ート、年賀パーティ

▼第十四回大学共同セミナー

昭和四三年三月中旬

全体講義

東京大学総長

大河内一男氏

専務理事ノート

講堂落成記念講演会の佐藤喜一
郎氏の講演は好評で中央公論十月
号の「自由化で日本経済は強くな
る」という論文はそのときの講演
である。

八月二五日の毎日新聞に私は
「大学のなかの大学」と題して開
館二年の成果について書いた。募
金その他でお世話になっている方
への感謝の報告である。九月二九
日の日本経済新聞は社会面に六段
抜きのカコミ写真入りで評判上々
のセミナー・ハウスを書いてくれ
た。大変な反響があった。

一億五千万円募金が目下の私の
急務である。募金の苦勞もセミナ
ー・ハウスの丘に立つと忘れてし
まうのである。

専務理事と職員たち

